「唯識（ゆいしき）」という生き方（1）

横山　紘一

横山　紘一 / よこやま・こういつ
1940年、福岡県生まれ。70年、東京大学大学院印度哲学科修了。現在、立教大学教授。
著書に、『唯識の哲学』『唯識とはなにか』『「唯識」という生き方』『唯識・わが心の構造』『十牛図・自己発見への旅』など。

私事の紹介からお話をはじめて恐縮ですが、私は3年前に奈良の興福寺で得度を受けました。この得度に至るまでの私の心の遍歴をまず述べさせていただきます。

私は小学校1年のとき、大分市の市内にある万寿寺という禅宗の専門道場の門前に移り住みました。引っ越してから数日後、どういうきっかけだったか分かりませんが、お寺で頭をクリクリと剃ってもらい、リンゴを1個もらって帰ってきた記憶があります。考えてみますと、正式ではないにしても、子供のときにすでに1度剃髪をしたことがあったのです。それ以来、寺の中で可愛がられ、多くの時間を寺で過ごすことになりました。当時終戦直後ということもあって、僧侶の数も少なく、修行もそれほど厳しいものではなかったようで、僧侶の方々によく一緒に遊んでもらいました。当時は大西和尚という方が住職をされていましたが、両眼がかなり離れた容貌のため、「金魚の坊さん」という愛称で親しまれていました。

厳しい修行生活ではなかったようですが、それでも時には僧侶の方々が禅堂で坐っている姿を垣間見ることがありました。子供の私にはそれがなんであるか分からず、ある日、和尚に「なぜあのように坐っているの」と尋ねると、和尚はそれには直接答えず、答えは「こんどわしが部屋で坐っているとき、襖を開けてみろ。すると部屋の真ん中に松が1本ドーンと植わっているぞ」という言葉でした。「えーっ、そんな馬鹿な」と思いましたが、しかし、あのように坐るということは、なんと凄いものなのかと子供心に思いました。

その和尚の一言が私の深層心に深く強く植え付けられ、それが、その後青年になって禅の修行を始め、そして最終的に剃髪するに至った最初の動因であったと今では思っています。他人から聞いた一言、それが人生の方向を決める大きな力になることを私は私自身の経験から知ることができました。

仏教の「唯識」という思想では、人間の意識を変革する力の1つに「正聞熏習（しょうもんくんじゅう）」があると説きます。それは正しい師から正しい言葉を繰り返し聞き、その言葉が深層の心の中に熏じつけられ、深層に潜んでいる素晴らしい種子にいわば肥料を与えてそれを成育せしめるという考えです。大西和尚のあの一言は、私にとってまさに「正聞」であり、その後その言葉が繰り返し私の心の中に生じてきたことは「熏習」であったといえるでしょう。

この体験が私が得度する最初の縁であったとすれば、第2の縁は次のような体験でした。中学校1年のときの1年間、原因不明でしたが3度ばかり意識を失って倒れたことがありました。その最後に倒れて、そして意識を回復し、寝ている部屋の格子戸から差し込んでくる夕日を見た瞬間、「いったいなにか」という声が叫びのごとくに心の中に生じてきたのです。今までなにも疑うことなく当然あると思っていた存在すべてが、いわば瓦礫のごとくに崩れ去り、得体もしれない恐怖感、虚無感が心底から突き上げてきて、それが「いったいなにか」という言葉となって噴き出してきたのです。

その後もそれほどに強烈ではないにしても、その気持ちは繰り返し私を襲い、「いったいなにか」という疑問は私の中でますます強くなっていきました。この体験によって植え付けられた「いったいなにか」という疑問は、青年になって仏教とくに禅に触れることにより、知的な、哲学的な問いとなって、私の坐禅修行の推進力となりました。

仏教に「発心」という言葉があります。発心とは詳しくは「発菩提心」といい、「菩提を得ようとする心を発する」という意味です。その菩提とはサンスクリットのbodhi（ボーディ）の音訳で、「悟りの智慧」という意味です。「いったいなにか」、本当に私たちは「自分」とはなにか、自分はどこから来てどこに去っていくのか皆目分かっていません。「自分」だけではありません。他人とは、自然とは、宇宙とは、広くは存在するとは、真理とはなにか、と問われたとき、これこれであると自信を持って答えることのできる人は皆無といっても過言ではありません。

これらすべてを含んで「いったいなにか」という問い掛けを背負って、よしその解決を目指して悟りを、すなわち菩提を得ようと決心することが発菩提心であり、そのように決心した人のことを「菩薩」（詳しくは菩提薩埵）といいます。

「いったいなにか」、これはホモサピエンスであればだれしもが若いときから持つ問い掛けです。しかし普通人間は大人になるにつれ、いわば世俗の事柄に翻弄されて、人間のこの根本的問い掛けを忘れてしまいます。「自分」「自分の家族」「自分の会社・地位」というように、「自分」「自分の」という思いと言葉に振り回されて、「自分とはいったいなにか」という問い掛けを忘却してしまうのです。だから「人生いかに生きるべきか」と問い掛けはしても、その主人公であ

る「自分」がなにものかと追求せず、いわば操り人形のごとく振り回されて生きるところに、迷いと苦しみとが生じることになるのです。

「いったいなにか」、この問い掛けは、私にとっては上記のごとく強烈な体験によってはじまりましたが、それが強烈であったからこそ、前の和尚の一言と同じく、私の深層心にその問い掛けが根付き、それが後の禅の世界に飛び込むもう1つの動因となったのではないかと思っています。

仏教に、そして禅の世界に飛び込むもう1つの、そして直接の動因は、大学に入ってから起こりました。それは、だれしもが大なり小なり青年期に持つ「自分への執われ」でした。当時私は人前で話すことが苦手で、いつも他人の中に入っていけないのではないかという思いに苦しんでいました。そのように執われた小さな「自分」をなくして、もっと大きく自由な“自分”に成りたいという思いから、大学の1年のとき、思い切って鎌倉の円覚寺内にある居士林という一般者向けの禅道場に飛び込み、1週間ばかり坐禅を中心とした生活をしました。初めの日、指導の僧侶の方から、「なにをするにしても無一無一と成りきってみろ」といわれ、人間本当に苦しむと素直になれるもので、その言葉に随ってとにかく無に成るべく頑張りました。そして1週間たって横須賀線に乗って東京に帰るときの体験を私は今でも鮮明に思い出すことができます。それまで苦しかった思いが薄らぎ電車の窓から見える風景が明るく輝き、車内の人々も笑っているように見えたのです。わずか1週間ばかりでしたが、なにかに成りきって行動することが、これほどに人間の心を変えるものかと、禅の修行の素晴らしさを初めて自ら体験しました。

「唯識」に、表層の心のありようはかならず深層の心に影響を与えるという思想がありますが、今この教理に基づいてあの居士林での体験を分析すると、わずか1週間の私の成りきる行為が、私の深層心から汚れを除き、幾分なりとも清らかにし、私の不安を少なくしたのであるといえるでしょう。

とにかくこのように、小学校のときの「いったいなにか」という問いの発生と、大学時代の「自分への執われ」に苦しむという2つが動因となって私の中で仏教への関心がますます増大してきました。

もともと医者に成ることを目指して大学に入ったのですが、途中でそれを諦め、農学部の水産学科で魚の血液を研究することになりました。与えられたテーマは、人間が癌になると増えるといわれるハプトグロビンというヘモグロビンの1つが魚にもあるかどうかを調べる研究でした。その研究を卒論からはじめて修士課程まで続け、20種の魚すべてにハプトグロビンがあることを発見しました。この研究成果を通して私は、人間も魚も「いのち」としてはまったく同じであるということを自ら知り大きな感動を得ました。

しかし魚の血液研究に私は段々と関心が薄れてきました。「いのち」を研究したいという意気込みで当時は早朝から夜遅くまで実験室に籠もって研究を続けていたのですが、同時に禅を修することによって、魚の「いのち」しかも対象化され分析された「いのち」ではなく、この己の、自らの「いのち」を知りたいという願いが益々強まり、とうとうある日、自然科学を去りインド哲学に入り直すことを決意し、それを実行に移したのです。

この「魚のいのちの研究」から「己のいのちの追求」への転向は、私にとって正しかったし、よかったことでした。なぜ「正しかった」かといえば、自らを通して自らのいのちを追求することこそ、真の意味での「いのち」研究であると今でも強く思っているからです。突然に現代的な話題になりますが、現代の遺伝子研究やゲノム解明は、遺伝子治療、食品改良などにおいては、それなりの意義があります。しかしそれのみの研究で、「いのち」とはこれこれであると断定する現代の風潮に対して私は強く異議を唱えたいと思います。一番の問題は、遺伝子を研究しゲノムを解明している研究者自身が「己のいのち」のなんたるかを追求することなく、たんに分析され対象化され記号化された「いのち」の研究にのみ従事しているということです。客観化された「いのち」、それはいわば鏡のなかの像の如きものであって、鏡像ではなく鏡そのものがなんであるかを研究し追求することの方がより大切なことではないかと私は思うのです。そのような思いが前述したように私をして自然科学からインド哲学に転向せしめた原動力となりました。

また私の転向がなぜ「よかったこと」であったかといえば、仏教を学び禅を修することで、私の自己への執われが徐々に薄まり、60歳を過ぎた今、もちろんまだまだ自己を捨てきっていないものの、当時からみれば、はるかに安心し自由に生きることができるようになったからです。